

# 「金閣寺」論

前田 貞 昭

## はじめに

今日三島由紀夫の傑作として定評を得ている「金閣寺」は、『新潮』連載当時（昭和三十一年一月～一〇月）から評価の声が高く、連載の終了した翌一二月の『新潮』、『群像』の合評会でもその論議の対象に取り上げられている。『新潮』では白井吉見、河上徹太郎、中村光夫の三人、『群像』では中島健蔵、平野謙、安部公房の三人が合評し、いずれも本年度の傑作という点で一応の一致を見ている。

一応の一致を見たと言いながらも、白井吉見の手放しの評価から平野謙の留保付きの評価まで幅広く、この二つの合評会でその後の「金閣寺」論の方向が尽くしている観があるが、中でも特に私が注目したいのは、白井吉見の、「三島自身を存分に表現したもの」という評言と、中村光夫の、「焼いたことで何も解決しないんだ。主人公も結局生きています。だから一種の絶対青春小説で、そこにでてくる青年は、みんな成長を拒否しているような青年なんだ。」つまり「敘事詩」にしかならなかったことを鋭く突いた評言である。

作者三島自身は、この作品の主題について、  
私が「金閣寺」で書いたことは、犯罪の動機の究明であつたが、「美」といふ淺薄な愚かしい觀念だけでも、國寶に對する放火といふやうな犯罪の十分な動機になり得る。<sup>(註三)</sup>

と述べ、また、「美といふ固定觀念に追ひ詰められた男といふのを、ばくはあの中で藝術家の象徴みたいなつもりで書いた」と発言している。これらの言葉から、美に憑かれた男（藝術家の象徴）の物語の構築に三島の意図があつたことを看取できよう。そのためか、三島の意図したところと同様の見地から、この作品を論じようとする傾向が目立って多い。例えば、磯田光一は、「美」（理想）と「世俗の人生」の二律背反のドラマとして捉え、

この作品の特質は、「美の信徒」としての三島氏が、「美」への復讐を志す

人物を描いたという点にあるであろう。<sup>(註四)</sup>

と、「金閣寺」を三島由紀夫論の文脈の中に位置づけようと試みている。また、光榮堯夫は、その著『三島由紀夫論』（五月書房・昭和五〇年一月）の中で、『金閣寺』には、藝術家にとって行為とは何か、またそれは可能か、という措定が隠されているのである。（一〇五頁）

と述べている。磯田光一は「世俗の人生」、光榮堯夫は「行為」と、言葉こそ異ってはいるが、いずれも、三島の自ら述べる「美」・「行為」の問題が基底に据えられていることにかわりはない。

このような「美」・「藝術家」を視点とした見解にも首肯できることがあるが、「仮面の告白」との連続を考へるとき、「美」・「藝術家」の次元に一般化され得ない三島の切実ではあるが彼岸な夢が、「金閣寺」の主人公溝口の願望の中に託されているように、私には思われるのである。

そこで、主として作品内部の検証によりながら、溝口の願望の姿、さらにはそこに託されたであろう三島のそれをも明らかにしてゆきたい。

## I

『新潮』誌上の合評会で河上徹太郎が指摘し、後に三好行雄、三枝康高、糸井通浩によって精密化された、「第一章自体が以後に展開する事件の伏線として、小説の全構造をいわばミニチュアのように明示する」という作品構造の把握は納得できるものである。その小説美学上の得失はともかく、主人公溝口の基底にあってそれを支配しているものの正体を明らかにしようとするとき、このような作品構造を踏まえて、第一章を考察の中心に置くことがふさわしいであろう。

その第一章では、要約すると、以下のような説明が溝口に付されている。——溝口において、外界に繰り広げられる現実と生き生きとした関係が結ばれず、孤立した内界が形成される根本要因は、かれの吃音である。その吃音の反動

として、「この世のごとくに、まだ私自身の知らない使命が私を待つてゐるやうな気がしてゐた」という自覚（この一種の選民意識は何らの現実的背景を持たない夢想に過ぎないが、吃音者の必然とでもいうように三島はこれを書いてゐる）、そして「自分が世界を底邊で引きしぼつて、つかまへてゐるといふ自覚」が、かれの内部に生まれた。——以上のように、三島は、吃音の劣等コンプレックスを溝口の基底に置いて説明する。

しかし、吃音に全てを帰する三島の説明で、溝口の心理・行動をわれわれは十分に納得できるであろうか。作品全体を規定する第一章で決定づけられ、そこから生成発展することのない溝口の性格づけとして、また他のあり得たであろう溝口の生の形をも否定することになる強力な説明として、この三島の説明はいかにも不十分であると、私には思える。例えば、何らかの形で劣等コンプレックスを抱きながらも、溝口のような生の行程を歩まなかつた人たちを、われわれの周囲に容易に見出すことができるのである。敢えて言えば、この吃音という条件の付与には、モデルに見出したそれをこぞとばかり三島が牽強付会した観すらするのである。（当然、ここから、これだけの説明で十分と判断した三島自身の性向の投影を読みとることもできるであろう。）

したがって、溝口の心理あるいは行動を十分に理解しようとするれば、吃音によってあらわになつたとしても言うべき溝口の内部の何ものかを、明らかにしなければならぬだろう。何が溝口を動かし、かれの存在を規定していたのか。以下、それについて述べてゆこう。

溝口は、自己の抱いた願望を無傷で実現することを希求する。多くの場合、人間は自己の願望をそのままの形で、現実に移すことは不可能である。意のままにならない現実と出会い、そこで自己の無力と有限性を否応なく自覚させられる。そして、その結果、歪められ、限定された形でしか、願望が実現され得ぬ事態を甘受しなければならぬことを知る。例えば、溝口が丹後由良駅で見かけた若い「驛員」のように、「この次の休みに行く映畫のことを、大聲で吹聴」する程度で満足しなければならぬ。しかし、溝口はこのような人間を軽蔑する。溝口には、かれらが愚かな現実で満足しているとか映らないのである。溝口は、そのように置を減ぜられ、変形された、凡庸なものでは満足できない。そうすることは、かれにとつては自己の矜持を捨て去ることであり、かれがかれでなくなってしまうことである。かれが夢想の中でそうであつたように、かれは全ての場面で自由でなければならぬのである。

だから、かれの願望が無傷で完璧に実現されるためには、その願望の対象や他の存在によつて、限定され、妨げられてはならない。かれが完璧な願望の実現を希求するかぎり、それはかれの内にとどまるものではなく、他人の世界へ進み出る。夢想の中で可能であるからには、現実の世界でも可能でなければならぬのである。そのため、かれが自らの願望を貫こうとすれば、他者を自己の支配下に置くことを願う結果になる。

では、その不遜な欲求を抱いて、それを実現するために自己を律してゆこうとするのかと言へば、そうでもない。「暴君や大藝術家たらんとする夢は夢のまま、實際に着手して、何かをやり遂げようといふ氣持がまるでなかつた」と、かれは、願望実現のための具体的な手続を放棄してしまつてゐるのである。

願望を無傷のまま実現することを希求し、かつそのための具体的な手段もとらないとすれば、願望を自己の内界に封じたままにする道だけが残されている。しかし、かれは夢想の中に、それを飼い続けることでは満足しない。

誇りをもつと軽く、明るく、よく目に見え、燦然としてゐなければならなかつた。目に見えるものがほしい。誰の目にも見えて、それが私の誇りとなるやうなものがほしい。

これは、海軍機関学校生徒の短剣を、嫉妬にかられて、傷つけようとする部分の引用であるが、この嫉妬には、裏返されたかれの願望を讀むことができる。この嫉妬の背後には、「誰の目にも見え」る「誇り」を希求する溝口の願望がある。他人の目に鮮やかに映ることを願う溝口の願望がある。内界で王者になつたとしても、自分以外の誰も明らかにそれを認める者がいなければ何にもならない。他人の目こそが（有為子との場面では、「證人」という言葉が使われている）、溝口の選ばれた者という意識、優越を保証してくれるのである。

このように見てくると、溝口の願望は、その完璧性、他者の目（証人）、他者の支配という三つを要件として、自己の願望をほしのままに実現させようとする欲求だと言へよう。これを「自在な自我」への欲求と呼ぶことにしたい。これが、溝口を支配しているものである。

では、溝口の抱く「自在な自我」への欲求の実現は可能なのであるか。溝口が、その完璧な実現を願うかぎり、かれは他人の世界へ出てゆかなければならぬ。ところが、かれはその実現のための具体的な手段を放棄してゐる。そのため、他人の世界では、虚弱な吃音者としての現実の姿があらわになり、その耐え難い自己の姿を直視しなければならぬ。たとえ、そこにおいて、壮大な夢想を

抱いていても、その内面は無視され、現実の前に非力な自己を見ざるを得ない。また、かれは、自己の有限性を直視することによる妥協の道を選ばない。そこで、かれは、焦燥感を抱きながらも、内界に閉じ籠らざるを得ないのである。かれの願望は、このような循環を繰り返すしかない願望であり、その循環の輪をどこかで断ち切らないかぎり、実現することのない途方もない願望であると言わざるを得ぬのである。

右に述べたことは、作品の各部分を次のように解釈することから、さらに明らかになるだろう。

人生で出会った最初の他者として象徴的な意味を担う有為子への挫折を描いた場面に、次のような一文がある。

しかし私には、外界といふものとあまり無縁に暮して来たために、ひとたび外界へ飛び込めば、すべてが容易になり、可能になるやうな幻想があつた。続いてこの「幻想」が現実の有為子によって破られるのであるが、この部分では、溝口が外界から隔絶し、他者の抵抗のない内界に安住していたことが語られている。有為子に触れぬかぎり（自己の内界に夢想を限定し、他者に触れようとせぬかぎり）、溝口の願望は完璧なままで存在を許される。このような内界にいるかぎり、かれは無上の幸福感の中にいることができるのである。

戦争はこの幸福をかれに約束した。だから、次の引用部分に見られる特殊な戦争観も、かれにとっては当然と言えよう。

私の夢みがちな性格は助長され、戦争のおかげで、人生は私から遠のいてゐた。戦争とはわれわれ少年にとつて、一個の夢のやうな實質なき慌しい體驗であり、人生の意味から遮断された隔離病室のやうなものであつた。

もっとも一介の徒弟にあって、特に金閣寺という隔絶された空間の中で、どれほどの意味を戦争が持っていたかは、幾分か疑問を残すところではある。（この引用文に見受けられる戦争の特殊な捉え方には、三島自身のそれが相当色濃く反映している。）しかし、「われわれ少年」という一般化された中では、一応そういうものとして納得できるであろう。自己の夢想に耽ることのできる内界、抵抗する他者に出会わぬ場（「人生の意味から遮断された隔離病室」）において、かれの幸福は保障されるのである。

ところが、溝口のこのような幸福も、次のような事情で、脅やかされずにはすまない。外因的には、成長して人生へ向かわねばならない時期が訪れ、幸福を約束してくれた戦争も終わってしまったからであるが、内因的には、また根本的に

は、その「自在な自我」への欲求が、その無限定性のゆえに、閉じられた内界での夢想に安息できる質のものではなかったからである。無限定な欲求は、夢想の内にとどまらず、外界へ、現実の世界へ向かう。そして、他者をそのまま受け容れるのではなく、他者を自己の欲求に従わせることを望む。だから、現実との疎外状況を語る次の部分にも、積極的、能動的な現実参与への欲求が見られることになる。

吃りが、最初の音<sup>や</sup>を發するために焦りにあせつてゐるあひだ、（略）待つてゐてくれる現實はもう新鮮な現實ではない。私を手間をかけてやつと外界に達してみても、いつもそこには、瞬間に變色し、ずれてしまった、……さうしてそれだけが私にふさはしく思はれる、鮮度の落ちた現實、半ば腐臭を放つ現實が、横たはつてゐるばかりであつた。

現実から疎外された嘆きを中心に書かれているが、その嘆きは、他者が与えてくれる現実を受け止めることのできない嘆きではない。その現実を受け止め、参与しようという、能動的な現実への関わりができない嘆きである。能動的に現実に参加することは、究極的には自分の意志に他者を従わしめることであり、他者を支配することである。

内界での無限定な夢想、そしてそれと現実との関係——これらのことから、溝口の願望の姿が浮かび上がってくるだろう。

## II

さて、以上のように溝口の心的な基本構造を捉えるとき、この作品に登場する人物を三つの系列に分けることができる。その一は鶴川・柏木、その二は有為子・老師、その三は母親系の人物である。

溝口を人生に促す鶴川・柏木の二人は、溝口にとっては人生の彼方からやって来る他者ではなく、かれが選択し得る人生の形を実在化した人物である。それゆえ、いびつではあっても、ある種の親近感を、鶴川にも柏木にも溝口は抱き続けている。しかし、かれは、親近感を抱くに止どまって、かれらの人生の跡を追う者ではない。

鶴川の人生は、第八章で明かされるように、柏木と同根の「生れつきの暗い心」を持ちながら、その裏返しとして、陽の極にある人生を体現するかのごとく示される。

こいつのシャツの皺みたいに、私の人生は皺が寄つてゐる。しかしこのシャツは何と白く光つてゐるだらう、皺が寄つてゐるままに。……もしかすると

私も？

明るい木洩れ陽の下に見た鶴川の姿から、自己の人生の可能性を読みとろうとする場面である。ここから、鶴川の体現している生の形が、溝口自身の「暗い自覚」と対応しつつ、そこから逃れたいというかれの望みとも照応していることが読みとれる。しかし、後に、鶴川自身の手によっても、また溝口の選民意識によっても、鶴川のような脆く壊れやすい人生の可能性は絶たれるのである。

この鶴川に対して、溝口自身の内にある「暗い自覚」、「内界の悪に沈まう」という決意の具体化された人物が柏木である。溝口から見れば、柏木の人生は次のようなものであった。

柏木は裏側から人生に達する暗い抜け道をはじめて教へてくれた友であった。(略)それは人生だった。それは前進し、獲得し、推移し、喪失することができた。典型的な生とは云へぬにしても、生のあらゆる機能はそれに備はつてゐた。

作品の展開中、柏木は溝口の人生の可能性が具体化された人物として重要な役割を占めるが、最終的には柏木の人生も溝口は拒否する。溝口の矜持ある「自在な自我」は、柏木の人生のような瘡癩的な人生に満足できない。溝口にとって、かれの人生は、完璧な、自己の夢想そのものが現実化されたものでなければならなかったのである。

自己実現の方法として、危険な暗闇を基底とすることも、逆にそれを裏返して明るく装われた人生を生きることかかれは拒否する。溝口の人生への欲求は、目前に示されたどのような人生も受け容れない不適な欲求である。三島は、溝口の未だ生きていない人生の形を、これら鶴川・柏木の上に展開してみせ、そしてそれを溝口に拒否させることによって、溝口の必然化されるべき人生——「別脱への、私特製の、未聞の生」の選択を必須のものとするのである。

この二人が溝口の人生の可能性が具体化されたものとすれば、第二の有為子・老師系の人物は、その目指す人生の対象が具体化された人物である。

溝口が最初の欲望の対象に選んだ有為子は、かれを拒絶した姿で眼前に屹立する。その有為子の背後に「他人の世界」を認めたという次の一節は、有為子の作品中の役割をよく語っている。

私は有為子のおもかげ、曉闇のなかで水のやうに光つて、私の口をじつと見つめてゐた彼女の目の背後に、他人の世界——つまり、われわれを決して一人にしておかず、進んでわれわれの共犯となり證人となる他人の世界——を

見たのである。

自己の欲求の不可能が明らかになったとき、他人の世界が証人の世界として認識され、有為子がその他人の原型としてのイメージを担うのである。作品中では、繰り返して、有為子は姿を変えて、女——他者のイメージをもって出現する。つまり、他人の世界の象徴として固定されたイメージに、有為子の役割があるわけである。

この部分でも、海軍機関学校生徒の短剣に傷つけようとした場面で「誰の目にも見え」る誇りを願ったと同様の、他人(証人)の目に鮮やかに映る自己を願った溝口の心理機制がうかがえる。ここでは、溝口の恥を証す、かれにとっては恐るべき他人の世界としてイメージされているが、かれの願望が望み通り実現されたときには、この「証人となる他人」は、溝口の輝やかしい誇りの証人にも逆転するのである。その意味で、証人としての他者を極度に意識する溝口の願望の在り方も読みとることができよう。

さらに付け加えるならば、溝口の不能の「証人」となり、不動院において「われわれの共犯とな」った有為子が、その直前には溝口を「証人」の場に着かしめて、「世界を拒ん」だ存在であったことも記憶しておくべきであろう。なぜなら、この世界と対立し、他人を「証人」とした有為子の行為に、溝口の金閣放火の原型を見出せるからである。

有為子とともに第二の系列中の人物とした老師田山道詮の存在は、奇妙な重量感を持ち、大きな圧迫感を溝口に与える。老師の艶やかな肉体は無言の重みで溝口に迫り、「奇怪な城のやうに」、「人間らしい心を持つた存在とは見えなかつた」ほどの精神的圧迫を溝口に与える。このような老師に対しては、その姿を捉えきれない焦燥感を、溝口は抱くしかない。

その老師に溝口が期待しているのは、老師が、父のように、あるいは禅海和尚のように、自らを包み込んでくれることである。これは所謂「母性原理」による包容を願っているのであるが、老師は溝口に対して正体の掴めぬ圧迫する他者として屹立するだけであり、溝口はそこから逃れることができないのである。

この二人の他者像に共通しているのは、いずれも官能的なものに繋ぎ合っている点である。有為子は溝口の肉欲の対象として様々に姿を変えて現われ、老師も肉欲のイメージが与えられている。すなわち、他者は肉体的、感覚的に触知されるという考え方が底流しているのである。因みに言えば、夢想は、その形は不確かであり、肉体的感覚的に触知されるものではない。この点で、他者は溝口の夢想と

相對立するものとして描かれているのである。

第一の系列の鶴川・柏木は、溝口の内部の思念から生まれ出て、かれを人生へ促すものであり、第二の系列の有為子・老師は、溝口の外部に肉体として存在し、その存在自体がかれを人生へ促すものであると言えよう。あるいは、鶴川・柏木の二人は、親和的に溝口を受け容れる存在であり、有為子・老師は、溝口の欲求の対象であると同時に、頑なにかれを拒絶し、かれの自足した世界を脅やかす存在であるとも言い得る。

第三の母親系列の人物としては、溝口の母親の他に、金閣寺から出奔して由良へ向かう三等車で見かけた老人、丹後由良駅の若い駅員等が挙げられる。かれらは、金閣が空襲で焼けることとはないと断言するかれの母のように、現世的判断に長け、「不治の希望」を持つ、平凡で愚かな俗世の生活者たちである。かれらは、溝口の持つような「自在な自我」への欲求を現実の前に放棄し、安穩に暮らすことを願う軽蔑すべき人間たちである。

金閣が焼けたら……、金閣が焼けたら、こいつらの世界は變貌し、生活の金科玉條はくつがへされ、列車時刻表は混亂し、こいつらの法律は無効になるだらう。

と、この人物たちの住む世界の秩序が転覆するという途方もない夢想の一節からも、溝口のかれらへの蔑視が見てとれる。

また、かれらは、溝口の「別誂への、私特製の、未聞の生」が実現されたとき、それを見届ける役目をも負わされている。あたかも、有為子が「世界を拒ん」だときに、溝口がその「證人」であったように、かれらも溝口のそれを見届ければならないのである。その時、かれらの「世界は變貌し、生活の金科玉條はくつがへされ、列車時刻表は混亂し」、「法律は無効になる」のである。

これまで、溝口の「自在な自我」への欲求という視点から、現実の世界とそこに住む他人との關係を中心に述べてきたが、この現実の世界と対極にある金閣、そして三島の終生のモチーフであった海についても、当然触れておく必要があるだろう。

父に金閣の美を教えられて以来、溝口は、美しいと感じるものに対して「心の中で『金閣のやうに美しい』と形容するまでになつて」おり、絶対的な美そのものとしての金閣がかれの内部に固着する。ところが、この絶対的な美そのものと

しての金閣は、かれを拒絶し、疎外する。

私には自分の未知のところに、すでに美といふものが存在してゐるといふ考へに、不満と焦燥を覺えずにはゐられなかつた。美がたしかにそこに存在してゐるならば、私といふ存在は、美から疎外されたものなのだ。

美そのものとしての金閣が向こうに存在し、かれはその越え難い敷居のこちら側にいるという右の図式は、そのまま、人生の欲求を抱きつつ、現実の人生に踏み込まずに立ちつくしているという、かれと人生の図式と同じ構図である。つまり、人生への欲求と、美そのものとしての金閣への欲求は、その疎外II被疎外の關係において、相似の構造をなしているのである。

基本的には右のように捉えることができるが、金閣が何度か、疎外する存在から、かれを包容する存在に変貌した点において、金閣と現実の世界には相違がある。

まず、金閣が溝口を包容する存在に変貌するのは、美そのものとしての金閣が、その永遠性を喪失し、確実に滅ぶものとして溝口に認知された場合である。台風下の一夜を金閣の中で過ごしたときにも、金閣はかれを包み込んでくれるが、最もよくその状況を語っているのは戦争下の金閣について述懐している部分である。

やがて金閣は、空襲の火に焼き亡ぼされるかもしれぬ。このまま行けば、金閣が灰になることは確実なのだ。(傍点ママ)

と溝口は考え、

この世に私と金閣との共通の危難のあることが私をはげました。美と私とを結ぶ媒立が見つかつたのだ。私を拒絶し、私を疎外してゐるやうに思はれたものとの間に、橋が懸けられたと私は感じた。

と語る。ここでは、美の永遠性が崩れ、金閣が溝口と共通の有限性の中に捉えられたときの、疎外状況の解消が述べられている。台風下の一夜においても、共通の有限性の中にある一体感が述べられ、この引用部分と同様の状況であり、双方の状況とも、美そのものとしての金閣が、永遠性を喪失するところに開けた状況である。

また、溝口が女と肉体的な交渉を持つときにも、金閣は立ち現われ、かれを包容する。ところが、このときの金閣は、戦争下あるいは台風下のそれとは異なり、永遠性を失なわず、その包容は溝口の行為を阻むのである。その最初である下宿の娘との場面は、

それ（金閣——引用者注）は私と、私の志す人生との間に立ちほだかり、（略）私をかこむ世界の隅々までも埋め、この世界の寸法をきつちりと充たすものになった。（略）時にはあれほど私を疎外し、私の外に屹立してゐるうに思はれた金閣が、今完全に私を包み、その構造の内部に私の位置を許してゐた。

と描写されている。そして、このような事態に至った理由を、「一方の手の指で永遠に觸れ、一方の手の指で人生に觸れることは不可能である」からだと溝口は考へる。美そのものとして永遠性を保証された金閣と、人生に女とが両立し得ない対立物として考へられてゐる。これは、そもそも美への欲求自体が、現実の人生に關わり得ない溝口の欲求の変形したものだからである。別の言葉でいえば、劣等補償として、現実の人生に代えて、美そのものとしての金閣を溝口は拉致してきたからである。有限の相対的な人生への欲求が満たされないため、それと対立し、それを価値的に上まわらざるべき無限の絶対的な美そのものとしての金閣を、溝口は置いたのである。二つに分裂した欲求（対立するべきものを選んだのであるから）——最初目指した現実の人生への欲求と、それに代わるべき美そのものとしての金閣への欲求——が同時に満たされるはずないのである。

永遠の美そのものとしての金閣は、このような形で溝口の心を占め、作品全体としても、現実の世界と対極に位置しつつ、相似の構造をなしているのである。では、溝口は現実の世界にある人生の姿をどのように思い描いていたのであろうか。それは、例えば、有為子に挑んで失敗に終わった場面で、次のようにイメージされている。

睡閣の中にかすかな輪郭をうかべてゐる村の屋根々々にも、黒い木立にも、青葉山の黒い頂きにも、目前の有為子にさへも、おそろしいほど完全に意味が缺けてゐた。私の關與を待たずに、現實はそこに賦與されており、しかも、私が今まで見たこともない重みで、この無意味な大きな眞暗な現實は、私に與へられ、私に迫つてゐた。

溝口を拒絶した世界が、意味を持った統制を失ない、裸形の現実として溝口に恐怖を与える。有為子の背後に控えた世界から与えられたこの恐怖は、老師の圧迫感と共通し、その根源は、「私の關與を待たずに」存在しているところ、溝口の関わり得ないところにある。溝口の「自在な自我」を願う先には、他者の住む現実の世界があり、その中でかれの願ひが実現され得ないものであるからには、それはかれにとって完全に意味の欠けた裸形の現実の世界でし

かない。かれの願う人生を實質あるものとしようとすれば、かれは自己の夢想の内から他人の住む現実の世界へ出て行かねばならないにも拘わらず、かれはその世界を敷居の内側から垣間見て、恐怖するばかりである。かれが恐怖のゆえに現実の世界へ出向かないとすれば、かれには人生への希求と拒否しなく、いずれの人生も自己のものとはならないのである。そうである以上、この恐怖すべき現実の世界というイメージは変わり得ないのである。

さて、三島の終生愛した海のモチーフが、この作品でも出現している。

この作品での海は、溝口を生み出した根源のものとして描かれてゐる。成生の、そして舞鶴（志楽）の海は、溝口を包容し、呑み込み、育んでくれる、いわば生存の根源である。溝口の生まれた成生岬、中学進学のために住んだ舞鶴の地が、海と深く結びつけて語られるのも、それを証している。

溝口は、その地を離れた後、再び海に向かう。それは言うまでもなく、「金閣を焼かなければならぬ」と決意した由良の海である。溝口は金閣を出走して、「幼時、成生岬の故郷で接してゐたやうな、生れたままの姿の荒々しい海」を求めて由良海岸へ向かう。かれが由良海岸で見出した裏日本の荒涼たる海は、かれのあらゆる不幸と暗い思想の源泉、「あらゆる醜さと力との源泉」と感じられ、そこでかれは「自足し」、「何ものにも脅やかされ」ない安堵を得る。このように、かれを生み、育くみ、包容する「母性的」な場として、海はかれにイメージされている。

この由良海岸で、「金閣を焼かなければならぬ」という想念を溝口は得る。由良海岸へ行くことで、溝口は始源の世界へ帰り着いた。そうすることによって、これまでの自己の在り方に死を与え、この由良海岸の海という「母性」の懐から、再び別様の人生へ乗り出そうとしたのである。金閣に取り憑かれた在り方を否定し、根源の力を得て、金閣の存在しないところにある人生を溝口は願つたのである。そこにおいて、「別誂への、私特製の、未聞の生」が始まるはずであった。

海は、このように再生を期することのできる、根源的な、「母性」の場として描かれてゐるのである。

#### IV

溝口は、金閣を焼き滅ぼそうとする決意を得たことによって、由良駅で見た平凡な人間たちを軽蔑し、自己の優位を誇つて、

私の内界と外界との間のこの錆びついた鍵がみごとにあくのだ。内界と外界は吹き抜けになり、風はそこを自在に吹きかよふやうになるのだ。

と金閣を焼き滅ぼした後に展開するべき己れの人生を信じる。

しかし、溝口の願う「別誂への、私特製の、未聞の生」は、実現され得るのだろうか。溝口自身は無論のことながら、作者三島自身も、それを希求しているようである。溝口の願う人生は、由良の駅員の平凡な人生でもなく、柏木のような暗黒の人生でもない。「別誂への、私特製の、未聞の生」であり、その生はかれの「自在な自我」への欲求に根差しているものである。とすれば、金閣を焼いたところで、かれの人生の新しい形が見出せるものではないのである。美そのものとしての金閣が溝口を捉えたのは、現実の人生の劣等補償として、かれがそれを要求したからである。だから、かれが「自在な自我」への欲求を放棄せずに、金閣を焼いたとしても、かれの望む人生は実現すべくもないのである。そもそもかれの現実の人生が開けないのは、「自在な自我」への欲求それ自体のためなのだから。

とすれば、溝口の望み得る最上の形は、あの戦時下のようになり、あるいは台風の一夜のように、金閣に包容されるとともに滅びることにあったのではないだろうか。金閣への放火は、次の個所にあるように、世界の破滅の臭いを漂わてせいらる。

……思ふほどに私は快活になつてゆく自分を感じた。今私の身のまはりを圍み私の目が目前に見てゐる世界の、没落と終結は程近かつた。日没の光線があまり横たはり、それをうけて燦めく金閣を載せた世界は、指のあひだをこぼれる砂のやうに、刻一刻、確實に落ちつつあつた。……

右に掲げたのは、「金閣の存在する世界」の没落という限定の上での夢想ではあるが、その没落に身を任せようとする溝口の官能的な望みが嗅ぎとれる。金閣を燃やす火に官能的な思いを抱き、さらに究竟頂で火に包まれて死のうと試みているところに至れば、自らをも含めた世界の破滅へと溝口は突き進んでいると考へなければならぬ。

たとえ、溝口が、そして三島が、「別誂への、私特製の、未聞の生」の可能性を見出そうとしても、その願望が「自在な自我」への欲求に根差しているかぎり、結末部の、

ポケットをさぐると、小刀と手巾に包んだカルモチンの瓶とが出て来た。それを谷底めがけて投げ捨てた。別のポケットの煙草が手に觸れた。私は煙

草を喫んだ。一ト仕事を終へて一服してゐる人がよくさう思ふやうに、生きやうと私は思つた。

というところに開けているはずの人生は、溝口の願った「別誂への、私特製の、未聞の生」ではあり得ない。そこには、溝口の切望した人生ではなく、かれの軽蔑した平凡な人生があるだけである。

実際のモデルは、金閣に放火した後、「金閣炎上を見つつかルモチン」のみ、小刀で身体をつき、昏睡<sup>(昏)</sup>している。三島は、放火事件の直前から忠実に実際のモデルをなぞりはじめ、カルモチン、小刀の購入、そして放火の夜の準備の手順は特に忠実であり、そのために、作品の進み具合が停滞する感すらある。ところが、右に掲げた最後の場面では、実際のモデルとは大きく食い違っているのである。

作品の構成自体の問題としては、中村光夫の「第十章の金閣寺を焼く場面を不要」とする意見もそれなりに首肯できるが、敢えて、実際のモデルとは異なつた形で筆が擱かれた第十章は、後の三島あの異様な最期と比べると、重要な意味をもって浮かび上がってくる。

金閣を焼いた後に訪れる溝口の安息感、かれの根底の欲求からすれば、ニセ物の安息感でしかないことは、三島も承知していただろう。(確かに、他人を驚嘆させ、自らの行為の証人たらしめた点で、溝口は満足を得ただろうが、かれの願っていたのは「自在な自我」を認めさせたいという持続する人生そのものへの欲求だっただけである。)では、この第十章における三島の意図は、ニセ物の安息に休らう溝口を突くことであつたのだろうか。そうではなく、ここには三島の一つの願望があつたのではないか。自己の欲求を、自己を破滅させぬままにかみとろうとする三島の願ひがあつたのではないかと、私には思われる。そうであれば、三島は、この最後の一節で、このように、溝口に嘲笑も軽蔑も皮肉も与えることなく、筆を擱くことはできなかっただろう。これは、溝口が生き残らなければ、この手記の形式をとつた作品が存在し得ないという類の、単なる方法レベルの問題ではない。

そして、三島の異様な最期は、溝口の「自在な自我」への欲求そのままの、途方もなく徹底した欲求の実現であつたのではないだろうか。溝口のようなニセ物の安息によって生きるのではなく、三島は、自己を破滅させることにおいて、より自己の欲求に忠実であつたのである。三島は、最終場面で「生きよう」と思う溝口のように、許され難い願望をニセ物の安息感の中に霧消させてしまふのではない

く、その実現のときが即ち自己の死のときであるという皮肉な、しかし死が逆  
に永遠性を保証する賢明な方法を選んだのである。比喩的にいえば、三島は、燃  
え盛る金閣の究頂で、火に包まれて死んだのである。

最初に述べたように、美と行為の対立をこの作品のテーマとして、その美に賭  
けた芸術家としての三島を見出そうとする読み方も確かに可能である。『波』  
(昭和四九年一月)に公表された「『金閣寺』ノート(その一)」には、次のよ  
うな一節もある。

ラストは、火をつけるべくしてつけざる男の話にするか？

「やはり私はつけなかつた。

あの男が代行したのだ。行為者は行為者。

芸術家は死の裡にとどまる」といふ結論。

大学の二人の友の話にするか？

林養賢は書かざる芸術家、

犯罪の天才。

＊

芸術家の行為を代行する男の話は「禁色」で沢山だ。

「◎プランⅡ」と記された断片的な言葉ではあるが、ここから芸術家と行為者  
の問題を抽出することもできよう。また、この作品自体がそのような読み方を要  
求していることも否めない。

しかし、それらのことを十分認めた上で、どのような人生をも選ばず、現実の  
世界を恐れ、ただ青春の猶予期間の中に身を置くことを願った三島の影が、この  
作品に色濃く落ちていることを私は指摘したい。三島が自ら自伝風な作品と言  
う「詩を書く少年」(『文学界』昭和二九年八月)に回想されているのは、

實際、世界がかういふ具合に變貌するときに、彼は至福を感じた。詩が生れ  
るとき、必ず自分がこの種の至福の状態に在ることに、少年は愕かなかつ  
た。(略)外界のはうがずつと彼を魅した。といふよりも、彼が理由もなく

幸福な瞬間には、外界がやすやすと彼の好むがままの形をとつたといふはう  
が適當であらう。

という、内界の夢想が自由に外界を支配する幸福な時間である。そして、この  
「詩を書く少年」を新潮文庫の自選短編集『花ざかりの森・憂園』(昭和四三年  
九月一五日)に収めたとき、自ら解説して、

彼を襲ふ「詩」の幸福は、結局、彼が詩人ではなかつたといふ結論をもたら

すだけだが、この墜落は少年を突然「二度と幸福の訪れない領域」へ突き出  
すのである。

と述べて、内界の夢想に生きる少年期が幸福のときであったことを強調してい  
る。これは、繰り返すまでもなく溝口の内界での夢想と照応するものである。ま  
た、戦争が与えた空白の恩寵も、三島が繰り返して、小説やエッセイ等で触れてい  
ることである。これらは全て現実の世界で他者と出会うことのなかつた三島の幸  
福のときを表現していると言えよう。

以上述べてきたように、主人公の造型に見られる、現実への恐れと内界への閉  
じ籠り、自在な自我への欲求、そして金閣放火の意味等、三島の姿が、溝口には  
塗り込められているのである。「仮面の告白」をホモセクシュアルに象徴される  
自己確認の書とすれば、この「金閣寺」は、「美」・「芸術家」の次元に一般化さ  
れ得ない三島の人生への願望を綴った書だと評せよう。そして、三島の最期の姿  
も、その十余年前のこの作品において、既に象徴的に描かれていることも付け加  
えておきたい。

注1、この合評会における発言を、再説・補足するために、「文学のあり方・4

・『金閣寺』について」(『文芸』・昭和三二年一月、のち『文学のあ  
り方』・筑摩書房・昭和三二年五月、三枝康高編『三島由紀夫・その芸術  
と運命』・有精堂・昭和四六年三月、白川正芳編『批評と研究・三島由紀  
夫』・芳賀書店・昭和四九年二月、等に収む。)が書かれた。

注2、「日記」(『新潮』・昭和三三年四月、昭和三四年九月、のち『裸體と衣  
裳——日記』・新潮社・昭和三四年一月、として刊行。)の昭和三三年  
六月一日(水)の項。引用は新潮社版『三島由紀夫全集』(昭和四八年  
四月、昭和五一年六月)による。以下、三島由紀夫の文章等の引用は、全  
てこの新潮社版『三島由紀夫全集』による。

注3、小林秀雄との対談「美のかたち——『金閣寺』をめぐる」(『文芸』・  
昭和三二年一月)中の発言。

注4、「作家と作品——三島由紀夫」(『三島由紀夫集・日本文学全集第八二  
巻』・集英社・昭和四一年一〇月)。のち『三島由紀夫論(1)——人と作品  
の承譜』と改題して『評論集・パトスの神話・増補改訂』(国文社・昭和  
四八年八月)に収む。引用は『評論集・パトスの神話・増補改訂』によ

る。

注5、「第一回目の真ん中までで——つまり臼井さんのいうこと（「僕は三島由紀夫の『金閣寺』（新潮）を一頁ばかり読んで、これはいいぞ。という豫感があったな。あの小説は、何かそういうところがあるね。初めから違うんじゃないかなあ。」との臼井吉見の発言を指す。）と同じかもしれないけれども、あれをしまいまでずつと語り盡しているところがあるね」と発言し、有為子事件、海軍機関学校生徒の短剣を傷つけるエピソードに触れている。

注6、「『金閣寺』について——其の構造」（『日本文学』・昭和三二年二月、のち長谷川泉他編『三島由紀夫研究』・右文書院・昭和四五年七月、に収む）、『金閣寺』鑑賞」（『現代日本文学講座・小説七』・三省堂・昭和三七年二月）、『現代文学鑑賞・金閣寺』（『国文学解釈と鑑賞』・昭和四二年四月）六月、のち「背徳の倫理——『金閣寺』」と改題して『作品論の試み』至文堂・昭和四二年六月、に収む。

注7、「『金閣寺』の作品分析——放火事件と『金閣寺』」（『日本文学』・昭和四六年三月、のち日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書・三島由紀夫』・有精堂・昭和四六年一月、『三島由紀夫・その血と青春』・桜楓社・昭和五一年九月、に収む）。

注8、「三島由紀夫『金閣寺』構造試論——文章論における意図をめぐって」（『愛媛大学法文学部論集』・九号・昭和五一年十二月）。

注9、三好行雄、前掲、「背徳の倫理——『金閣寺』」。

注10、『群像』の合評会の席上で、平野謙をはじめとする評家が、柏木の存在のリアリティを疑い、磯貝英夫「金閣寺——巧緻な模型」（『国文学解釈と鑑賞』・昭和五一年二月）に、「主人公の脇侍である鶴川や柏木はカイライに留まる」とあるのも、そこに原因があるだろう。

注11、小林淳鏡「金閣放火僧の病誌」（『犯罪学雑誌』・昭和三五年一〇月、のち『現代のエスプリ』・昭和四八年五月、に収む）。引用は『現代のエスプリ』による。

注12、中村光夫、前掲論文。

注13、三好行雄「人文Vのゆくえ——『金閣寺』再説」（『国文学解釈と教材の研究』・昭和五一年十二月）に同じ箇所を引いての論及がある。